

君たちは何故大学をめざしているのですか?
大学では何をしますか?
河合塾では、勉強をアシストするだけでなく、
もっと視野を広げ、現代社会の様々な領域の“知”と出会えるよう、
好奇心を刺激する多彩な文化行事を開催しています。
それぞれの場面で何を考えるか?
河合塾は君たちが新たな自己と対面することを期待し、
君たち自身が進む道の探求を応援していきます。

好奇心は、創造力の源です。
多彩な文化行事。

SCHEDULE

文化行事 今年度の予定

都合により実施日・会場・プログラムが変更になることがあります。
詳細については後日告知します。

千種校



講演

「経済学的に考えるとはどういうことか」
講演者 山田銳夫(名古屋大学経済学部教授)

名駅校



映画
+
トーク

「いまアジアは、～アジアの現在と未来～」
香港映画『フルムーン・イン・ニューヨーク』上映
上映映画監督を迎えて

千種校



講演
+
質疑応答

「オウム問題とジャーナリズムの役割」(仮題)
講演者 二木啓孝(『日刊ゲンダイ』記者)

千種校



講演
+
スライド

「チェルノブイリ10周年—後遺症に苦しむ人と医療援助のあり方」
講演者 鎌田 實(諏訪中央病院院長・チェルノブイリ連帯基金会長)

名古屋校



講演

「戦後史の大転換－1989-1991」

講演者 柳沢英二郎(前愛知大学法学部教授)

名古屋校



講演

「パプアニューギニアの自然」
講演者 野間口真太郎(佐賀大学助教授)

名駅校



講演
+
トーク

「子どもの権利を考える」
講演者 坂本秀夫(中央大学講師)



講演

「建築から環境工学へ」

現在
交渉中

映画
+
トーク

映画上映とその監督を迎えて

経済学的に考えるとどう、どうことが

●日 時：6月8日(土)

15:00～17:00

●会 場：千種校体育館

●講 演：山田 銳夫

(名古屋大学経済学部教授)

●紹 介：公文 宏和

(倫政・小論文科講師)

植田 雅之

(英語・小論文科講師)

山本 和男

(国語・小論文科講師)

経済学あるいは、広く社会科学という道具を使えば、何が見えてくるか。受験で学習する政経のテキストや、小論文の社会科学系の問題文の分かりにくさは、どこに原因があるのだろうか。どうしてあんなに分かりにくい特別の言葉を使うのだろうか。分かりにくく専門用語を使うことで、何かが見えてくるのだろうか。少なからず疑問に思ったことである。ここで、一度落ち着いて経済学という学問を使うことで何が見えてきて、何が隠れてしまうのかを考えてみたい。

今回講師をお迎えした山田先生は、どうしたら学問が、一人一人の市民の血肉としての知識になるかということを、専門的研究を進めることと同時に並行して追及してこられた篤学の人である。この機会に先生のお話を伺えるのは、普段の勉強をもう一回り大きくするのに役立つだろうと考えている。君たちに講演への参加を勧める。

オウム問題と ジャーナリズムの役割

オウム事件は、僕等の
「内なるオカルト志向」の
反映だつたのであるまいか

国語科 牧野 剛

闘争のその質に規定されている所はないのか。

又、高校中退・校内暴力・イジメ自殺等々と続く教育問題は、この問題に影を投げかけていないか。もし、この直感が当たつているとすれば、先の共通一次問題と共に、オウムは「もう一つの教育問題」でもある可能性がある。

III

『TBS事件』が起り、オウム事件が実はマスコミ関係の事件でもあることが、誰の目にも明らかになつた（他の一つとして、『裁判・司法問題』もあることは明らか）。マスコミは、その中で、「もう一つのオウム」であることが明白化した（何と、オウム事件が喧しい時、手からモノを出す・物質化するインドの聖者サイババがTVで報じられ、又、UFOや宇宙人の遺体を流すF-TV等があつたのである）。つまり、マスコミは、マッチ・ポンプである。一方でオカルト的雰囲気を煽り作り出し、他方でそれをたたくという方法である。その両者の癒着ぶりは、ある点では両者が精神的に双児であることを示しており、偶然、今回それが暴露されただけであるわけだ。

IV

I
オウム真理教の一連の事件が起つた時、僕等はあまりの荒唐無稽さにあきれはてると共に、何か凶々しいものを感じたものであつた。それは僕等の内にも、知らず知らずの間に繁茂してしまつた反科学・科学批判→オカルトへの接近」という思想の存在であり、又、「風の谷のナウシカ」への共感を象徴とする近代への嫌悪、超常現象への憧憬、いかがわしいことは分かつてゐるが魅かれてしまふ新興宗教的行動への思い入れ、等々の存在のことである。
II
そういうえば、共通一次試験が採用された十数年前、塾内に蔓延した流行があった。「ノストラダムスの大予言」「富士山の爆発」「惑星の一直列」「ソ連の侵入」等が、その時の塾生のやり場のない現実と自律性を持ち得ない社会変動への期待となりながら塾内を席巻したのである。（オウムの故村井氏も同世代である）。つまり、オウム事件は、僕等の「内なる問題」であることは明白である。

サリン事件等々の表面化した陸續するオウム関係の事件での、オウムと「国家」との対立抗争を見聞した時、多くの人々は、あまりのマンガチックな発想に嘲笑したものである。しかし、こうした「国家」との対峙は、なにを隠そうあの六〇年代後半から七〇年代初頭の新左翼の暴力闘争や「狼」の企業爆破等々と同じ根を持つものではないか。そして、その内容のある部分は、七〇年代の公害・反核

二木啓孝(ふたつきひろたか)氏の経歴

1949年、鹿児島県出身。

明治大学中退。出版社勤務を経てフリー。週刊ポスト専属記者。

1983年、日刊現代編集部へ。現在、ニュース編集部長。

政治取材をメインに、企業犯罪、獄獄事件などをテーマにしている。

近年はオウム事件の取材を通して、TV等のマスコミで活躍。

著書「手に取るように政治が分かる本」(共著・かんき出版)

●日 時：7月5日(金)

17:00~19:00

●会 場：千種校本館6F SDPホール

●講 演：二木啓孝(『日刊ゲンダイ』記者)

●紹 介：牧野 剛(国語科講師)

1986年4月26日、旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所4号炉が爆発、前例のない多量の放射性物質を放出し、北半球全体の環境を汚染した。

事故から10年が経った今年、事故の影響で汚染地の小児に甲状腺癌が多発していることがWHO等の国際機関によって確認された。また、同じく、児童の免疫能力に異常が起き、チェルノブイリ・エイズという名前で広く知られるようになった。しかも、治療を行う、ベラルーシの医療施設のレベルは日本の60年代と同程度で、急激に増加する疾患に対して、十分な治療ができない状況にある。

1990年の秋、現地からSOSのメッセージが届いた鎌田さんは早速、友人たちと「日本チェルノブイリ連帯基金」(JCF)を設立、91年以来25回以上、甲状腺癌や小児白血病の専門家の医師団、放射線測定及び医療機器の専門家を派遣し続けている。このNGO活動を信州大学医学部関係者、全国各地の草の根の人々がボランティアで支えている。

鎌田さんは20年間、信州の土地で、住民とともに考え、生きて行く地域医療を諏訪中央病院をベースにして、実践してきた。“Hospice without walls”（壁のないホスピス）、在宅ケアの24時間体制、東洋医学センター、老人保健施設、等。

「あったかな医療」、「福祉と文化との混じりあい」、「国際交流」のスローガンの下、ベラルーシ共和国の人々との交流を医療活動を通じて続けるJCFのNGOの活動と医療援助のあり方について、スライド上映をまじえて、話してもらいます。

■日時 9月18日(水) 17:00~19:00

■会場 千種校 本館6F SDPホール

■講演 鎌田 實(諏訪中央病院長)

■司会 阿木 幸男(英語科講師)

プロフィール：鎌田 實(かまたみのる)

諏訪中央病院長、「日本チェルノブイリ連帯基金」理事

老人保健施設「やすらぎの丘」施設長

諏訪看護専門学校長、藤田保健衛生大学医学部客員教授

著書「医療がやさしさをとりもどすとき」

「風よ吹け」(在宅介護信州からのメッセージ)

後遺症に苦しむ人々と 医療援助をするNGOの活動

チェルノブイリ10周年